

これまでの会議（全体・圏域）でいただいた御意見等について

1 全体会議

第1回全体会議（令和2年6月 5日）	2ページ
第2回全体会議（令和2年8月 3日）	3ページ
第3回全体会議（令和2年9月10日）	3ページ

2 圏域会議

(1) 仙南圏域会議

(1-1) 第1回仙南圏域会議（令和2年6月22日）	4ページ
(1-2) 第2回仙南圏域会議（令和2年7月17日）	5ページ
(1-3) 第3回仙南圏域会議（令和2年9月 2日）	6ページ

(2) 仙台圏域会議

(2-1) 第1回仙台圏域会議（令和2年6月18日）	7ページ
(2-2) 第2回仙台圏域会議（令和2年7月22日）	7ページ
(2-3) 第3回仙台圏域会議（令和2年8月26日）	8ページ

(3) 大崎圏域会議

(3-1) 第1回大崎圏域会議（令和2年6月29日）	9ページ
(3-2) 第2回大崎圏域会議（令和2年7月20日）	10ページ
(3-3) 第3回大崎圏域会議（令和2年8月31日）	10ページ

(4) 栗原圏域会議

(4-1) 第1回栗原圏域会議（令和2年6月25日）	11ページ
(4-2) 第2回栗原圏域会議（令和2年7月15日）	12ページ
(4-3) 第3回栗原圏域会議（令和2年8月27日）	13ページ

(5) 登米圏域会議

(5-1) 第1回登米圏域会議（令和2年6月24日）	13ページ
(5-2) 第2回登米圏域会議（令和2年7月16日）	14ページ
(5-3) 第3回登米圏域会議（令和2年8月26日）	14ページ

(6) 石巻圏域会議

(6-1) 第1回石巻圏域会議（令和2年6月12日）	15ページ
(6-2) 第2回石巻圏域会議（令和2年6月26日）	16ページ
(6-3) 第3回石巻圏域会議（令和2年7月16日）	17ページ
(6-4) 第4回石巻圏域会議（令和2年9月 4日）	17ページ

(7) 気仙沼・本吉会議

(7-1) 第1回気仙沼・本吉圏域会議（令和2年6月18日）	18ページ
(7-2) 第2回気仙沼・本吉圏域会議（令和2年7月14日）	19ページ
(7-3) 第3回気仙沼・本吉圏域会議（令和2年8月27日）	20ページ

1 全体会議

(1) 第1回全体会議

【日時】令和2年6月5日（金）13時30分から15時45分まで

【場所】県庁4階特別会議室

【委員からの主な意見】

- ① コロナからの回復のため、まずは県内・国内の需要喚起から始めるべき。これまで海外に行っていた人が、今後は国内に目を向ける可能性がある。
- ② 宮城は安全・安心だということを、デジタル等を活用し、早急に対応すべき。
- ③ コロナの影響によりこれまでのビジネスモデルの転換が迫られている。
- ④ 安全・安心がキーワードだとすると、住んでいる人がそう思わなければならない。
- ⑤ 東日本大震災では、それぞれのネットワークが強くなったが、コロナではネットワーク自体が失われたので、ネットワークの再構築が必要。
- ⑥ 震災や災害等により崩壊したコミュニティの復活、地域の活力の再生などの取組が必要。
- ⑦ 無担保融資等はあるが、あくまで延命措置なので、特化した支援が必要。
- ⑧ 仙台七夕祭りなど、多くのイベントが中止になったが、再開あるいは別な形で実施できるよう支援を検討してほしい。
- ⑨ 震災体験コンテンツの充実など東北・宮城の優位性を打ち出す取組を行うことが大切。
- ⑩ 県から説明のあった安心・安全の取組は、秋保・作並でも先行的に行おうと思っていた取組があるので、ぜひ早急にチェック表の作成等に取り組んでいただきたい。
- ⑪ 観光バス三密を避けるため増便の必要性があり、補助制度など手厚い支援が必要
- ⑫ 空港としても安心の継続的な取組や空港で発生した感染者の受入体制などの準備が必要。
- ⑬ 短期的には知名度のあるキラークンテンツで国内流動を戻し、中長期的にはインバウンドなどは、より深い体験型観光等の取組が必要。
- ⑭ テレワークと家族単位の旅行需要をキーワードに、テレワークとワーケーションの観光地づくりを進めていくのはどうか。
- ⑮ 外国人の目線でも、安全に移動し過ごせるかが重要。ガイドラインは、最初から海外の情報や国際基準を取り入れながら策定すべき。
- ⑯ 海外からの誘客には、現地の安心の取組（例えば病院のリスト）等を周知すべき。
- ⑰ 新しい生活様式でお客様をもてなすための施設の改修に対して支援する制度を設けてはどうか。
- ⑱ 空港の再開に向け、移動及び宿泊に向けた不安の払しょくを行うことが必要。
- ⑲ 今後の観光戦略としては、着地施策を中心に構成すべき。
- ⑳ 回復戦略は、「みやぎ絆むすび丸プロジェクト」などといった、絆を再構築するといったイメージがあるといいのではないか。

(2) 第2回全体会議

【日時】令和2年8月3日(月) 13時00分から15時00分まで

【場所】県庁2階講堂

【委員からの主な意見】

- ① 宿泊業界はまさに正念場、身近にも廃業や経営譲渡に至った施設もあり、危機感を持っている。
- ② 選ばれるためのキーワードは「SDGs」、「DX(デジタルトランスフォーメーション)」、「MaaS」。先進観光地のMaaSは、出発から帰宅まで全てスマホで予約決済が可能。ぜひ取り組んでほしい。
- ③ これからはVR(バーチャルリアリティ)に高い可能性を感じている。世界的には観光とVRを結びつけたプログラムが多数存在しているが、日本ではまだ少ないので取り組めないか。
- ④ 現在の回復戦略案では、デジタル変革の考え方が薄いのではないか。コロナの危機、震災復興の完遂に対応するため、デジタル変革の推進を戦略の幹に位置づける必要があると考える。
- ⑤ ワークーションにマイクロツーリズムを取り入れ、体験コンテンツが充実すれば、地域経済が活性化し、都市部からの企業誘致が進む可能性があるため、県が率先して取り組む必要がある。
- ⑥ 将来、インバウンドを進める中で、日本の新型コロナ対策がはっきり見えないという問題がある。安心して来てもらうために、例えば温泉に入るときの対策などを具体的に明示する必要がある。
- ⑦ 感染者数中心の報道により恐怖心が植え付けられ、旅行を躊躇につながることを危惧している。感染対策や医療体制を含めてトータルでPRし、重傷者数等の正確な情報に基づき、観光施策を粘り強く継続してほしい。
- ⑧ 県内の需要回復のあとは、東北で多い域内観光をどう作って行くかが重要。コロナ感染が少ない東北域内の需要喚起・流動が大きく動いておらず、それを創出することが極めて重要なポイントである。
- ⑨ 東北域内は少子高齢化が特に顕著になってくるので、コロナ収束時に向けて、インバウンドのマーケットを意識することが必要。広域という視点で高単価の客に長期滞在してもらえるよう、仙台空港がある宮城県が全体を牽引する取組をしていく必要がある。
- ⑩ インバウンドの減少等で簡単に観光が傾くことのないよう、例えば、県内2、東北3、国内3、インバウンド2のように観光客の割合の分散化など、ポートフォリオの考えが必要。特化することは強みだが、リスクに耐えられない構造となるので、あらゆるリスクに影響されにくいリスク分散型観光の宮城モデルを構築すべき。

(3) 第3回全体会議

【日時】令和2年9月10日(木) 13時30分から15時30分まで

【場所】県庁4階特別会議室

【委員からの主な意見】

- ① コロナの影響がまだまだ続く中で、デジタル変革や持続可能というのは、一つの大きなキーワード。理念がすばらしくても、実際に事業者がどう理解し、取り組んでいくかが問題であり、もう一段階掘り下げることが大切である。
- ② 「DX」「SDGs」という言葉は、やはり欠かせない言葉なので、明確に理念にも入れたほうが良い。

- ③ 関係人口という言葉があったが、回復戦略では、ぜひワーケーションにまで踏み込んでいただきたい。
- ④ 例えば、「デジタルファースト」という言葉を入れて、「交流人口の拡大に加えて関係人口の拡大をデジタルファーストで行う」のように書き込まれるのはどうか。また、デジタルにアクセルを踏むと言うことを明確に文章化されると良い。
- ⑤ 現在も安心安全は、セルフチェックである程度担保されているとは思いますが、もう一步突っ込んで、第三者の視点も加え、しっかりと厚めのチェックをして、他の地域よりも、安心安全の担保をより大きくしてもらえると良い。
- ⑥ ビジネスモデルを転換するためには、規制や条例などの見直しをしなければいけないので、そのような表現をしていただければ良い。
- ⑦ この1年半で、デジタル変革への対応や、当然、様々な取り組みを行わなければならないが、逆に、将来に繋がる施策もしっかり打ち込んで、インバウンドを誘客できるようなエッジを、どうやって宮城県の観光の中に取り入れていくかという大きな一つの視点があっても良い。
- ⑧ 回復戦略の中では、第4期プランにある「にぎわいの創出」がなく、なかなかこの時期に書くのは難しいとは思いますが、そういった街や地域のにぎわいの創出の回復が団体旅行等の大きな塊の動き、それから本来の回復に繋がるものである。
- ⑨ 計画の基本理念の部分の言葉については、短期的な緊急性のある計画と捉えるのであれば、もう少し強い形の基本理念としてはどうか。例えば「デジタル変革に対応した」ではなくて、「デジタル変革を進めて」というような表現はどうか。
- ⑩ コロナ禍以外でも様々な災害はあり得るので、その対応を踏まえた観光の回復案づくりというのは大切である。東日本大震災を経験した地域が、ある意味強みをうまく生かせれば、全国の雛形になる観光回復戦略案がつけられるのではないかと。

2 圏域会議

(1-1) 第1回仙南圏域会議

【日時】令和2年6月22日(月)10時00分から12時00分まで

【場所】大河原合同庁舎4階大会議室

【委員からの主な意見】

- ① 安全安心対策コストへの支援や対策(宮城県としての具体的な取組み)の情報発信が必要。いかに安心につなげるか、マインドの部分が重要。
- ② 感染症対策をした上で営業している旨をSNS等で、近隣の顧客へ葉書による案内でPRし、ようやくお客様が来てくれつつある。
- ③ 体験・「コト」消費の推進が重要。観光資源の掘り起こしや磨き上げが必要。
- ④ MaaSと関連付け、密にならない、混雑しないという安全・安心情報の共有化・ネットワーク化をするべき。
- ⑤ 仙南地域の一体的なポータルサイトによる情報発信を行ってほしい。仙南地域ECサイトの立上げなど。

- ⑥ No 密観光のための朝型観光へのシフト，温泉オフィス，温泉でのワーケーションが重要。
- ⑦ 入湯税を活用した温泉街の活性化，イメージ向上やバーチャル観光を動画で配信してはどうか。
- ⑧ 少ない収容人数・売上の中で利益を出すための経営体質改善とそのため支援策が必要。
- ⑨ 行政側で支援メニューを用意するのではなく，それぞれの事業者がやりたいことに対する支援が必要。
- ⑩ 先々のインバウンドの対象として，さらに国際交流の観点から，現在生活に困窮している外国人留学生対象のツアー企画などを行ってはどうか。
- ⑪ インバウンドの取組について，手法を再検討するべき。
- ⑫ 自転車での移動も多いことから，サイクルツーリズムの呼び込みが必要。
- ⑬ 仙台，県内，東北といった近隣の客が戻ってきている。マイクロツーリズムの視点が必要。特に仙台をマーケットとして見直す必要がある。
- ⑭ 多くのお客様に来ていただきたいが，マスクをしていない方もいるので対策をしていくにあたり，不安もある。
- ⑮ SDGs の考え方は，世界的な指標であり，今新型コロナウイルスの回復の考え方にも当てはまる。
- ⑯ 現状，観光統計調査は観光客入込数での計測だが，正確な実態把握のため売上高で計測できないか。

(1-2) 第2回仙南圏域会議

【日時】 令和2年7月17日(金) 10時00分から12時00分まで

【場所】 大河原合同庁舎4階大会議室

【委員からの主な意見】

- ① どこの圏域でもワーケーションやマイクロツーリズムといったワードが出てきているが，そもそも我々のエリアが得意としていたもの。観光だけでなくビジネスということでも，ワーケーションや移住の希望者は都会にはまだまだいると思われ，そういった方々への情報発信や情報のどこをどのように繋ぐかが重要。
- ② 他圏域の会議での発言をみると，大崎でも石巻でもやはり最終的にはアクセスが問題になる模様。なので，コンテンツで仙南を結んでいくという流れで誘客していきたい。
- ③ インバウンドでは観光はまだまだ戻らないと思うが，仕事で来る方を広告塔として活用できないか。安心安全な宮城を伝えて，SNS等で拡散してもらえれば。
- ④ 国際交流の視点で留学生との交流などの事業を掘り起こし，地域で国際交流をすることによりインバウンドにつなげていく必要がある。
- ⑤ 観光で大事なものは“食”の分野。ガイドラインに従うと席を減らさなければならず，人が入っても売り上げは伸びない。そういったところへしっかりと支援を。
- ⑥ 県には，宮城県民に県内を回ってもらうようなキャンペーンをやってもらえないだろうか。
- ⑦ 回復とはコロナ前に戻すことではない。価値観も変わるし，コロナ以外のリスクもある。ビジネスモデルを変えていく必要がある。

- ⑧ 回復戦略の概要「視点3（1）みやぎにしかないアドバンテージ（東北DC，東京オリパラ，復興10年）を活かす」とあるが，誰に対してのアドバンテージなのか。絵に描いた餅にならないようアドバンテージをしっかりと考えてもらいたい。
- ⑨ 回復戦略については，総花的ではなく，ターゲットを絞り検討する必要。
- ⑩ 宿泊、交通など仙南の中での観光の連携をもっと強くしていく必要。
- ⑪ 現場の具体的な声を聞いて計画に落とし込んでいくと，段々とどこにでもあるようなありきたりの言葉になってしまう。今回何か突破口を見つけるような言葉が計画に出てくるとよいと思う。現場の声をならさないで，拾い上げてもらいたい。

（1－3）第3回仙南圏域会議

【日時】令和2年9月2日（水）13時30分から15時30分まで

【場所】総合会館 LaLa さくら蔵王の間

【委員からの主な意見】

- ① 感染症防止のブレーキを踏みながら，観光振興のアクセルを踏んでいかななくてはならない。
- ② 視点2（3），視点3（1）が非常に大事。地域を知り，交流を図りながら，ファンになり，いかにリピーターになってもらうかが大事。「リピーター」という言葉を付け加えてほしい。
- ③ 回復戦略後を考えてみると，視点2（2）（3）が長期的な視点で見ると非常に大事。同じ地域，近い地域の人を対象とすると，より深いディープなコンテンツが求められるので，各地域の今ある資源をまた新しい視点，切り口で洗い出し，発信していくことがベースとなる。
- ④ キーワードは“外”。中で過ごすより，外で過ごすことに安心感・開放感を感じる。
- ⑤ 若年層や子供連れプランを考えてほしい。観光にもっと出て，色々な場所を知ってもらって，観光は子供の教育にもよいという機運を醸成してほしい。
- ⑥ 県内でもやはり南の人は北へ，北の人は南に行くほうにモチベーションが上がると思うので，こうした南北間の交流から広げていくのもよい。
- ⑦ GoTo トラベル終了後に危機感を感じている。2021年は東京からの集客を目指し，2022年位にインバウンドも考える。それから，2025年の大阪万博をめがけて，日本に来る外国人を東北に持ってくるという計画がいいのではないかな。
- ⑧ 回復戦略は，最後にある取組一覧が肝となる。ロードマップのイメージについて，順調にコロナ対応が進んでいく場合と進まなかった場合をある程度想定し計画を立てる必要がある。
- ⑨ 基本理念は，「デジタル変革に対応した」より，積極的にデジタル変革を進めた上で新しいビジネスモデルを創出するという意味で，「デジタル変革を進め」の方が良いのではないかな。
- ⑩ 健康やリフレッシュなど，そういった観光地作りを目指すべき。視点1は非常に受け身，宮城に来たらすごく健康になった，元気が出てきたということを全面に出していくべき。
- ⑪ 仙南地域は，食，買物，体験，温泉など非常に贅沢なコンテンツが揃っている。委員有志によるWGを設置し，観光モデルプランを作成し，旅行会社に提案してみてもどうか。
- ⑫ 各コンテンツを結び付けるというWG活動を通じて，エリア全体の底上げができればよい。

(2-1) 第1回仙台圏域会議

【日時】 令和2年6月18日(木) 13時30分から15時40分まで

【場所】 仙台合同庁舎10階1001会議室

【委員からの主な意見】

- ① 地元の人が地域の魅力を知り、その魅力に対するシビックプライドを持つことで、一人一人が「観光マン」となるような機運を醸成する啓発活動を実施する。
- ② 仙台市は、転出入者が毎年それぞれ4万人を超えている。転入者は新しい見込み客となる。転出した方は転出先で宮城県、東北を発信していただければ有効なピーアールとなる。
- ③ 感染対策を実施している事業者が貼りだせるようなステッカー・標示等を迅速に配布する。
- ④ 感染防止対策の徹底に向けた設備投資への補助など、受入態勢の整備が必要。
- ⑤ 感染対策の基準や、イベント開催の判断指標を示す。
- ⑥ 「マイクロツーリズム」として、仙台圏域内、宮城県内や東北+新潟県の中で交流人口を増やして行くためにどうすれば良いのか。
- ⑦ 公共施設(博物館・美術館等)や公共交通機関への補助や無料化を実施し、街歩きを促す。
- ⑧ 中長期的視点に立って、5G環境整備への支援・補助を行う。
- ⑨ 震災や今回のコロナの影響により借入金が増大しており、影響が長引いた場合、半年から1年後に事業が成り立っているのか心配。
- ⑩ 仙台圏域は、仙台市を核として宮城県さらには東北にとって大きな影響力を持つ地域である。それだけに、様々な分野で仙台市と今こそ一枚岩となってどの様な連携が可能かについて検討することが必要と思う。
- ⑪ 安全安心対策を実施したものの、情報発信ができていない。
- ⑫ 新型コロナウイルスの早期の収束を図り、アフターコロナの準備をして行かなければならない。
- ⑬ 県民に安心感を与える対策をきちんと実施しているという情報を発信して欲しい。
- ⑭ 団体客や宴会客を取り込むのが難しくなっているので、対策を考えなければならない。
- ⑮ 県内や東北のお客様に対し、宮城の魅力を県や地元の間人がどんどんSNS等で発信するなどの話題作りが必要。
- ⑯ マイカーで来る個人のお客様が多いが、将来的にはバスの普及は不可欠。
- ⑰ 来年は東北DCなので、プレDC企画など、日本中から注目を浴び、取り上げてもらえるような情報発信が必要。

(2-2) 第2回仙台圏域会議

【日時】 令和2年7月22日(水) 13時30分から15時30分まで

【場所】 仙台合同庁舎10階1001会議室

【委員からの主な意見】

- ① 観光客向けに感染症対策を周知する標示等を導入する。
- ② 観光に携わる事業者、従業員の安全・安心を担保するための施策を実施する。
- ③ 「東北六県相互に交流しています」「東北は安全です」など東北全域としての安全宣言を行う。

- ④ 外国人留学生や労働者、技能実習生等が新型コロナウイルスに感染した際の対応を検討する。
- ⑤ 宮城県・東北は冬期の観光誘客が弱い。
- ⑥ 単独市町村だけでは、数日間滞在していただくことは難しい。
- ⑦ 圏域内市町村が連携した取組が必要である。
- ⑧ 仙台圏域から宮城県内、新潟を含めた東北地方、関東圏と、段階的に誘客を回復させる。
- ⑨ 訪れた人の心を動かすような、コト消費に働きかける仕掛けづくりを行う。
- ⑩ 冬期における観光客入込数の増加に向けた、新たなイベント等を実施する。
- ⑪ 各市町村で観光に携わっている方々の発信力を集約して、大々的な宣伝を行う。
- ⑫ 専門的・客観的な意見をいただき、それを地域の観光に活かす機会をつくる。
- ⑬ 県内立地企業の従業員に向けた情報発信を行う。
- ⑭ 県内立地大学に通う留学生からの意見を取り入れる。
- ⑮ 他都道府県の人に、宮城県がどのように映っているかを一つの指標とする。
- ⑯ インバウンドや若い世代はネット環境を重要視し、SNSを積極的に活用している。
- ⑰ 教育旅行・修学旅行の需要が増えている。
- ⑱ SDGsや持続可能性を意識した観光の取組を行う。
- ⑲ 少人数グループでの観光をターゲットとした誘客を行う。
- ⑳ 教育旅行・修学旅行の需要増加が一過性で終わらないように情報発信や受入態勢整備を行う。

(2-3) 第3回仙台圏域会議

【日時】令和2年8月26日(水) 13時30分から15時30分まで

【場所】仙台合同庁舎10階1001会議室

【委員からの主な意見】

- ① 「持続可能で選ばれる観光地をつくる」のとおり、新たな観光資源の開発も必要。
- ② 長期的なものとは今すぐできることを分けて、市町村と一体となって進めるべき。
- ③ 「宮城らしい新しい観光」のイメージを県民に理解していただき、共有することが大事。
- ④ デジタル化も大事だが、コロナ禍前の人と人とのふれあいが宮城の観光で一番大事。
- ⑤ デジタル化は、業務効率、改革という意味で、宮城の観光が全体的に変われば良い。
- ⑥ 安全安心と地域の魅力をどのように県民に伝えるかの施策を実施して欲しい。
- ⑦ 商工会・商店街の活性化も必要。地域活性化の主役は彼らであり、行政による支援も必要。
- ⑧ 住民も県外からの客も不安がある。安全安心の見える化、客の不安払拭が一番の対策。
- ⑨ 観光のリスタートに対して、どれくらい他地域と差別化ができるかが重要。
- ⑩ 安全安心の基準が不明確であり、どの様な行動が危険かを発信する方が危険回避に繋がるのではないかと。利用者側もどこに気をつければいいのかを発信することが重要。
- ⑪ Wi-Fi、5Gの環境整備支援は、オリンピックもあるので早めに予算化の努力をして欲しい。
- ⑫ キャンペーンに合わせて高速道路を割り引きできれば、域内交流を後押しできるのでは。
- ⑬ シビックプライドの醸成時には、文化財や地域の自然環境、SDGsなど未来に関することを子どもたちに対してもアプローチして欲しい。

- ⑭ デジタル化に対応できない方々にも，宮城県の観光に興味を持っていただき，参加してもらうにはどうしたら良いのかについても手厚く考えて欲しい。
- ⑮ 県と市町村との連携，市町村同志の取組を強化していくことは非常に重要。市町村の参加はどうなっているのか。
- ⑯ 後で，何をしたのかを分かりやすく振り返り，その効果が分かるようにして欲しい。
- ⑰ 宮城の観光の新しいイメージを作っていくには，マスコミ活用が有効なので県全体で予算化して発信して欲しい。

(3-1) 第1回大崎圏域会議

【日時】令和2年6月29日（月）13時30分から15時45分まで

【場所】大崎合同庁舎1階大会議室

【委員からの主な意見】

- ① 大規模な旅館では，県内の宿泊客だけでは採算ラインを確保できないことから，関東方面からの宿泊客の誘客を進めていきたい。
- ② 新しい生活様式が定着して行く中，安全・安心に重点を置いたおもてなしが必要だが，経費も人手もかかる。今後，客足の動向にかかわらず，公共料金や管理費等の固定経費はかかるので，どのように収支バランスをとっていくかが経営上の課題である。
- ③ コロナ禍において，旅行需要を高めていくには，受入側の地域とも連携した旅行や外出をしようといった観光機運の醸成が大事である。
- ④ スポーツレジャーはここ10年で最も伸びており，資源投下しマーケット化して行きたい。また，観光振興を進めていくためには，消費者動向の分析やマーケットの誘導が必要である。
- ⑤ 行動のエリアが広がれば不安も広がる。ステップ1～3も県外移動が一気に全国まで広がっているが，もう少し段階を丁寧に細かくして行く必要があるのではないか。
- ⑥ 東北六県内の旅行等を対象にした支援策があると良い。
- ⑦ 感染拡大防止とトレードオフが大事であるが，来てくださいと言えない中で，どのようにして誘客するのか。そのためには，地域の底力として魅力アップや職員のおもてなし教育が重要と考える。
- ⑧ 近隣地域との連携により，観光客を周遊できるようにしたい。また，地元の人に地元の魅力を知ってもらえるような取組みが必要である。
- ⑨ 国・県・市町村が地元の意向に沿いながら，有効的に活用できるような観光振興事業の制度設計を検討いただきたい。
- ⑩ 健康を売りにしたワーケーションを推進したいが，鳴子温泉は，硫黄ガスにより電子製品等の劣化が早いので機器の更新費用がかかるので，支援してもらいたい。
- ⑪ 市町村では人員が不足していることから，県が観光需要を拡大のため，観光のCMを作成・放送していただきたい。
- ⑫ 鳴子温泉で休前日に花火を打ち上げる場合，誘客支援として県が支援できないか。

- ⑬ 大きなマーケットである教育旅行について、関東から東北への方面変更など問合せ増えてきており、バス利用が三密回避のため台数増による経費増が見込まれることから、インパクトのある助成をお願いしたい。

(3-2) 第2回大崎圏域会議

【日時】 令和2年7月20日(月) 13時30分から15時30分まで

【場所】 大崎合同庁舎1階大会議室

【委員からの主な意見】

- ① 観光・宿泊施設、鉄道、バス等の消毒・フィジカルディスタンスの取組みとして、他県ではまだ実施していない県保健所からの衛生指導を、定期的なモニタリングを含めてお願いしたい。
- ② ①の指導を遵守している施設等には県から証明書を発行してもらうことはどうか。
- ③ ①について、他県よりも安全・安心な取組だということを広くPRしてもらいたい。
- ④ 全国的に見れば本県はまだ感染者数が少ないことをもっと周知すべきであり、当面は比較的感染者数が少ない東北6県(新潟県を含めて7県とすることも可)の観光客誘致を、重点的に行うべきである。
- ⑤ 観光地の土産物店の経営は厳しい状況にあり、支援策として、県で土産物を購入し、各種表彰の際の記念品等と一緒に授与する制度をつくってもらいたい。
- ⑥ 現在の厳しい状況を乗り越えるための施策も大事だが、感染症が収束した後を見据えた観光振興施策の検討も必要である。
- ⑦ 大崎圏域の観光地と仙台空港を直通で繋ぐ高速バスの運行を認めてもらいたい。
- ⑧ 地元の方々が取組むお祭り・イベント等に助成してもらいたい。
- ⑨ 通常、大都市で行われている国際会議等を地方都市で行う誘致活動を行ってはどうか。
- ⑩ 少人数のハイキング等を積極的に展開してはどうか(オルレを含む)。また、観光客が道に迷わないよう道案内地図に展開できるQRコードを表示した看板を設置してはどうか。
- ⑪ 海外では台湾がコロナから収束されたようなので、台湾に向けた観光PRは続けた方がよい。
- ⑫ 観光事業者への支援制度が多様にあるので、県から情報を配信してもらうと助かる。
- ⑬ 観光地及び宿泊施設等において、従業員及び観光客の具合が悪くなった場合に備え、医療機関との連携がとれる体制整備が必要である。

(3-3) 第3回大崎圏域会議

【日時】 令和2年8月31日(月) 13時30分から15時30分まで

【場所】 大崎合同庁舎1階大会議室

【委員からの主な意見】

- ① 施設側の自己点検だけでなく、外部機関が指導するといった安全・安心を担保するような取組にすべきである。また、周知は報道だけでなく、口コミの方が効果的で、差別化に繋がる。
- ② 大崎圏域でワーケーションを推進する場合、対象としては仙台勤務者が中心になると想定されるが、交通費等のコスト面では不利となるので対策をお願いしたい。

- ③ デジタル技術の活用は今後必須となる可能性が高い。感染予防のためにもホテルのチェックイン・アウトのシステム導入に支援してもらいたい。
- ④ 世界農業遺産の取組により観光スポットに設置した看板にQRコードを表示しており、読み込むと解説の映像を見ることができる。このような看板を多く設置してはどうか。
- ⑤ 回復戦略のロードマップのスケジュールどおりに進むことは難しいのではないか。
- ⑥ 会議等への旅館の使用は利用者が少ないと聞いており、家族向けが良いのではないか。
- ⑦ アウトドア（キャンプ）の客が増加しているが、施設の宿泊客と比較すると消費額が小さい。
- ⑧ 観光バス等による団体旅行が激減しており、団体旅行があっても、現在は1台に定員の半分程度の20人程度しか乗せていないため、1台分の人数を2台のバスで移動している。
- ⑨ 県内の観光客を対象とした観光（マイクロツーリズム）を通じ、ファンづくり等の地道な活動が必要である。
- ⑩ 県外から大勢の観光客を呼び込むことは、コロナがもう少し収束してからではないか。
- ⑪ デジタル技術の活用、回復に向けたイベント開催等は、一市町村だけでは難しい。県・他市町村・観光関係者等との連携した取組が不可欠である。
- ⑫ 商店（土産物店）の方々の努力している姿が見えにくい。

（４－１）第１回栗原圏域会議

【日時】令和２年６月２５日（木）１３時３０分から１５時３０分まで

【場所】栗原合同庁舎３階第一会議室

【委員からの主な意見】

- ① 観光施設に係る新型コロナウイルス対応に係る「ガイドライン」を、一刻も早く作るべき。
- ② これからは、他人との接点の少ない、限られた範囲の人だけで旅行が多くなることを予想しているが、栗原市は、密集が少ないので、適性がある地域なのではないか。
- ③ 栗原のお酒を栗駒山でキャンプをしながら楽しむ、宿泊を伴うようなイベントや、少人数で、栗原のお酒を飲んで一つ知識もつけて帰ってもらうようなツアーなども提案できれば良い。
- ④ 新型コロナ以前のように他県からや、インバウンド等による誘客はリスクが高いため、「県内の人が県内で楽しむ」ということに力を入れたらよいと思う。
- ⑤ 地元で田植え体験等、地元の方々が楽しめるような、地元の方々のモチベーションを上げていく取組を続けていくと、他の地域や外向けの良いPRになるのでは。
- ⑥ 栗原地域は、もともと宿泊客が少ないので、観光コンテンツの充実を先に考えた方が、効果が大きいのではと考えている。
- ⑦ 「観光産業の危機管理体制」について、このような状況下において、元に戻すだけで良いのか、新しい視点を取り入れて、関連産業との協調を図りながら進めるのが良いのか、今後の大きな課題と思っている。
- ⑧ 圏域から出られないということであれば、圏域内の移動が重視されてよいのでは。30分から1時間の間で行き来できるような圏域内で完結する観光も大事と思う。
- ⑨ 「ふるさと教育」、「郷土愛」を身につける必要があると感じており、ふるさと教育による郷土愛の植え付けが必要と考えている。

- ⑩ 栗原市出身者（アンバサダー）やふるさと会の方々に、故郷への支援をお願いしたい。
- ⑪ 各施設等の新型コロナの安全対策について、圏域として、もっとPRしてはどうか。「新たなもてなし」について、みんなで考え、作っていくという取り組みが必要。
- ⑫ インバウンドは、現状、非常に少ない。昨年、「Visit MIYAGI」に情報を初めて掲載したが、どのような結果になるか期待をしていたが、コロナの影響でダメになった。

（４－２）第２回栗原圏域会議

【日時】令和２年７月１５日（水）１３時３０分から１５時３０分まで

【場所】栗原合同庁舎３階第一会議室

【委員からの主な意見】

- ① 計画期間が１年半位の計画に、社会情勢が日々変化する中で、これだけ項目として重厚に作り上げる必要があるのか。今は、状況変化に柔軟に対応できるようなシステム（仕組み）づくりを検討すべき。
- ② 「基本理念」や「視点１，２，３」について、栗原圏域の特性には合わない表現がある。
- ③ 「官民一体となって…」について、個別（事業者、団体等）による取組の方が「スピード感がある」「集客がしやすい」等という面もあるので、個々の取組に対して行政や業界団体等がどのように伴走するのか、或いは、行政等の仕掛けに市民や業界団体等がどのように一緒に取り組むかといったシステム（仕組み）づくりが必要である。
- ④ 「安心ブランド（安全安心）」については、具体的に数字や図で示せるようにしていただきたい。誰が見ても安全管理がなされている地域としてPRするべき。
- ⑤ 「ガイドライン」の内容や、万が一感染者が出た場合の対応策等について、観光関連施設等で働く職員の理解を進めるようなサポートが必要である。
- ⑥ 観光客を受入れる側の安全・安心の確保も必要である。客側の感染予防対策の徹底や、一定条件により入場を断れるような基準が必要である。
- ⑦ 「関係人口の拡大」には、まず地元を目標にするべき。地元の人々が地元の魅力を再認識し、興味を惹かれて人が集まることで賑わいとなって地域外からも人を惹きつけ、関係人口の拡大に繋がる。
- ⑧ 東京での感染拡大を踏まえると、東京を含む「県外」から客を呼び込むよりも、まずは「県内」、もっと小さい範囲の「市町村単位」を対象とするなど、段階的に進めるべき。
- ⑨ 計画で使用する文言は、誰でも理解できるような分かりやすい表現とするべき。
- ⑩ インバウンドについては、現状は厳しいが、長期的には必要である。地域の魅力をインバウンドの視点で点検したり、ニーズに応えられる情報や人材等の集積を図るなど、将来に備えた準備をする必要がある。
- ⑪ 新型コロナ禍でのデジタル技術の活用は重要であり、情報通信の地域格差が生じないよう整備を進めて欲しい。リスク管理の面からも、電波の不通地域の早期解消に取り組むべき。

(4-3) 第3回栗原圏域会議

【日時】令和2年8月27日(木) 13時30分から14時30分まで

【場所】栗原合同庁舎3階第一会議室

【委員からの主な意見】

- ① 安全・安心の部分では、受入れ側の安全確保については、取組の方向性としてはよいと思う。今後、少しでも早く、具体的な対策について、地域の方々にわかりやすく提示出来れば良い。
- ② デジタルトランスフォーメーション(DX)については、沖縄県でデジタルを活用した旅行体験や、北海道でオンラインの農業体験など、コロナ禍での取組として展開されており、特にインバウンド対策を考えても、県としてDXへのシフトを早急に進めて欲しい。
- ③ マイクロツーリズムの推進では、地域の人たちによる地元での活動への協力など、小さな取組から始めていき、まず地元の人たちが楽しみ、その様子が周りの人たちの気を引いて、その輪を広げていくというのが、アナログ的だが、栗原地域に向いているやり方と思う。
- ④ 回復戦略の原案では、県北と県南を行き来するような取組など、県全体としての仕掛けづくりも必要ではないか。
- ⑤ 栗原圏域の施策の方向性等について、全体的な考え方は良いが、全部やるのは難しいので、どの取組に力を入れていくかが重要。(2)の市民が地元の魅力に気づく機会提供やふるさと教育、(3)の『自然』を活かした体験プログラム等による修学旅行等の誘致推進は、優先して取り組む必要があるのではないか。
- ⑥ 回復戦略策定後においても、市、県、関係団体が集まって、具体的な取組等に関して意見交換が継続できるよう、圏域会議等の開催など、ソフト面での対応もお願いしたい。
- ⑦ 回復戦略を、どのように具体化していくか、どのようにアクションを起こしていくかが大事であり、スピード感を持って進めていただきたい。

(5-1) 第1回登米圏域会議

【日時】令和2年6月24日(水) 10時00分から12時00分まで

【場所】登米合同庁舎5階501会議室

【委員からの主な意見】

- ① 登米市は農業大国なので、農業体験、農泊も含めて活用できれば、他地域にはない登米独自の観光コンテンツができるのではないか。
- ② 新たに関係人口に取り組むため、企業の社会貢献活動、福利厚生、社員研修等の受け入れを進めたいので、行政の力を借りながらぜひ実現していきたい。
- ③ 欧州のボート会場はリゾート化しており、オリンピック出場国の受入、支援にとどまらず、長沼をリゾート化する夢があってもいい。
- ④ クラウドファンディング2割増しではインパクトに欠ける。企業側に負担を求めてもいいので、もっとインパクトのある設計にしてほしい。
- ⑤ 風土マラソン等のイベントに外国人も含め県外客の参加が相当数あるものの、イベント参加のみで終わってしまう。登米市産の食、飲が楽しめる、農業体験もできる観光コンテンツ等を造成し、参加客等の市内観光地等への二次誘導と宿泊者の増加につなげる取組が必要。

- ⑥ 今までは、農業だけ、観光だけ、イベントだけでやっていたのを横に線をつないで一緒に自分事として、観光振興に取り組むことが必要。
- ⑦ 登米市は自然にあふれており、自然から商業施設への距離も非常に短く、キャンプやアウトドアに非常に適している地域。登米市の強みを活かした地域マーケティングが必要。
- ⑧ 登米市は二次交通の問題を抱えており、客に乗ってもらえるルートづくりが必要。
- ⑨ 朝ドラの収録がされるのでロケ地ツアーと農業体験を組み合わせたツアー造成も良い。
- ⑩ 個々で観光や、地域活動、まちづくり活動する人が沢山いるが、個人単位での実現は難しいため、意見やアイデアを集約して、まとめて良いものを作り上げてくれるリーダーが必要ではないか。

(5-2) 第2回登米圏域会議

【日時】令和2年7月16日(木) 10時00分から12時00分まで

【場所】登米合同庁舎5階501会議室

【委員からの主な意見】

- ① コロナ禍においては、訪れる側、受け入れる側双方の安全と安心が必要。
- ② 登米市の自然環境や豊富な農林畜産物を生かしてワーケーションも推進した方が良い。
- ③ 登米市民が自らの市内の魅力について話し合い、学ぶ機会が必要。
- ④ 登米市の認知度を向上させる取り組みについて、テレビ等メディアの活用、市出身や縁のある著名人の活用、SNSの口コミの利用等、様々な方法について知恵を絞って取り組んでいく必要がある。
- ⑤ 「おかえりモネ」によって一時的に認知度が向上すると思うが、一過性で終わらせない取り組みや工夫が必要。
- ⑥ タクシー業界としても、これまで待ちの姿勢だったが、この会議を契機に積極的に観光に関わることができるよう取り組んでいきたい。
- ⑦ コロナ禍にあっても、観光を通じた人と人との交流の大事さを発信していくことが重要。
- ⑧ 県全体としても言えることだが、今後はますますデジタルトランスフォーメーション(DX)を積極的に推進していく必要がある。

(5-3) 第3回登米圏域会議

【日時】令和2年8月26日(水) 10時00分から12時00分まで

【場所】登米合同庁舎5階501会議室

【委員からの主な意見】

- ① 安全安心の取組について、一律の基準で取り組ませるだけでなく、ミシュランガイドのように事業者が自ら考えて目標を立て取り組み、それを評価する仕組みも検討してほしい。
- ② コロナ禍で現実の移動が制限されている中で、ゲームコンテンツとのコラボなど、オンラインを活用した観光の仕組み、さらには観光収入に結びつけられる仕組みも有効。
- ③ 旅行者に選ばれる地域、お金を出してもまた来たい、と思えるような地域になる必要があり、そういった価値を創り出す施策、取組が必要。

- ④ 補助や割引等旅行者に対する支援施策が目立つが、広告費補助や受入態勢の充実等、施設側に対する支援も手厚くしてほしい。
- ⑤ 単に割り引いて安くして誘客を図るのではなく、旅行者、事業者お互い納得の価格で、そこに付加価値を付けて旅行者の満足度を向上させるのが本来あるべき姿。
- ⑥ 地元の食材を使用している飲食店等が意外と少なく、その食材がどういった背景でその地域で作られてきたのか知らない人が多いので、そこを学びPRしていくのも満足度向上の一案。
- ⑦ みやぎの明治村は中核となる観光施設だが、石ノ森章太郎ふるさと記念館など訴求力ある施設もほかに点在しているので、それらも絡めて一体的に観光推進していく方策もある。
- ⑧ 登米市には伊豆沼、長沼、平筒沼などのほか、南方の千本桜、蓮の花などもあるので、登米市の豊富な自然、四季を活かした年間を通じて連続したコンテンツも有効。
- ⑨ グランピングは、形態によっては簡易宿所としての許可が必要であり、グランピング一本では厳しいので、ソロキャンプも含めたキャンプ全般をテーマにしたほうがいい。
- ⑩ 「おかえりモネ」については、放送開始後は、ファンがロケ地巡りをするなど様々な動きが出てくるので、気仙沼地域との連携がさらに重要になってくる。
- ⑪ 一次産業が盛んな地域であるので、一次産業者と協力して連携する仕組みを作り、地域の事業者みんなが一体となって地域を勉強する機会があってもいい。
- ⑫ 観光振興リーダーの育成と併せて、観光ガイドの育成も行うべき。地域の観光コンテンツについて勉強できる、まとまったテキストがあると良い。

(6-1) 第1回石巻圏域会議

【日時】令和2年6月12日(金) 14時00分から16時00分まで

【場所】石巻グランドホテル鳳凰

【委員からの主な意見】

- ① 松島と比較し、石巻の強みは海産物等の「食(食べ物)」ではないか。
- ② 体験型コンテンツ(ワカメの収穫や島巡り等)の整備が必要。
- ③ 「適疎」のフレーズを利用し、観光戦略とすべき。
- ④ 東松島のオルレについては、4月と5月でも一定程度の需要はあった。野蒜、宮戸八景等のオルレ中心に、3密を回避したコンテンツが好まれるのではないか。
- ⑤ 震災のボランティアなど、心理的なつながりによる関係人口にアプローチしたらどうか。
- ⑥ 防災と観光の視点、観光客受け入れのための安心・安全の可視化が必要。
- ⑦ いざ観光に行こうとなったときに、心理的な壁(世間体)が気になる。地域も含めて旅行に行ってもいいという雰囲気や学校における休暇の分散化など旅行しやすい環境づくりが必要。
- ⑧ オンライン体験の充実も観光の入口になる。
- ⑨ ピンチをチャンスに。今がマイクロツーリズムのチャンス。
- ⑩ ステークホルダーが多い体験型観光や、コロナ禍によるワーケーションの環境整備により、交流人口や関係人口を増やす取組を実施すべき。
- ⑪ 東松島市の他にはない特徴としてSDGs未来都市、「スポーツ健康都市宣言」や防災・観光教育施設などがあり、関係者が連携して取り組むことが必要。

- ⑫ 「駅から観タクン」「定期観光バス」「デジタルによる情報発信」など既存の情報の整理・発信のほか、県の「みやぎ応援ポケモンのラプラス」を活用できないか。
- ⑬ 広域的に食材などをテーマに同時イベント開催などで観光客を呼んではどうか。
- ⑭ 地域の観光スポットなどをつなげ、ターゲットごとにコースを設け、その中で交通や宿泊施設を利用してもらうと良い。
- ⑮ 小さな観光が豊富にあることが大事で、全員がプレーヤーとして一体となって取り組むことが必要。

(6-2) 第2回石巻圏域会議

【日時】令和2年6月26日(金) 14時00分から16時00分まで

【場所】KIBOTCHA多目的室

【委員からの主な意見】

- ① 適疎の表現を工夫し、観光客へ訴求していく。松島などの密から疎へなど訴え足を延ばしてもらう。
- ② 適疎と石巻は親和性がある。ただ、適疎だと思って来たらそうでなかったとならないよう、適疎の定義を議論する必要。適疎の取組がビジネスモデルとなるよう石巻をブランド化してはどうか。
- ③ 当面、家族単位の旅行になるが、ゆとりのある子育てが終わった世代をターゲットにすると良い。
- ④ 車のない人や、JRで来ると二次交通が必要。地域を巡るオプションツアーが必要。
- ⑤ 観光と体験、食を組み合わせたオプションツアーを沢山つくり、選択の幅を広げる。
- ⑥ 数日掛けて周遊してもらうエリアになるよう地域のつながりを検討する仕組みも必要。
- ⑦ ボランティアから移住した方や、Uターンした方など、優れたコンテンツを持っているが、得てして組織と組みたがらないので、こちらから繋がりに行く必要がある。
- ⑧ 金華山参りで金持ちになれることを関西でPRすれば、格安航空もあり観光客が見込める。仙台空港からこの地域へのバスを整備できないか。
- ⑨ 島を観光資源と考えると、航路を乗り継ぎ移動できる仕組みはどうか。
- ⑩ 情報発信が大切である。既に素晴らしい観光素材があり、それぞれの分野で頑張っている。旅行者への届け方が課題である。
- ⑪ 旅行業者など地元以外の方の意見を聞くべき。石巻地域は素晴らしいという方は多い。
- ⑫ 専属に人を雇い、SNSの発信や、リアルタイムで対応するコンシェルジュとする。
- ⑬ オンラインコンテンツは採算をとるのは難しい。地域の魅力発信などPR的な要素が高いため、公的な支援があると良い。食材のほかタクシー券を送るなど観光してもらう仕組みはどうか。
- ⑭ ワークेशनについて、民宿や学校の空きスペースを利用し、さらに、自然を楽しむ。来年、オリンピック開催中に、企業の皆さんを事務所ごと、宿泊施設などへの誘致に取り組んではどうか。
- ⑮ 若柳出身の有名な脚本家に、地域の魅力再発見など提案をしてもらうと良いと思う。

- ⑯ 東日本大震災により人口が減り、人員的に不足を感じる。コンテンツも大事だが、最終的にはサービス、おもてなしをする人も大事だと思う。

(6-3) 第3回石巻圏域会議

【日時】 令和2年7月16日(木) 14時00分から16時00分まで

【場所】 女川ふるさと交流館

【委員からの主な意見】

- ① やはり安心安全対策に尽きる。宿泊客からの声も上がっており、一番大事なところである。
- ② 栃木県那須の観光関係機関では、東北エリアに修学旅行のプレゼンテーションを始めた。
- ③ ワークーションについて、度肝を抜くような施策、例えば土地の無償貸与などできないか。
- ④ これまで一番「疎」と感じたのはお遍路だった。松島から金華山を歩くのはどうか。また、バスやタクシーを乗り継ぐ、自転車も一緒にと考えれば、観光が広がるのではないか。
- ⑤ 修学旅行が近場となり、当社に問い合わせがあり、防災教育や食事などの施設の情報を含め、対応するためのプログラム作りに取り組んだ。
- ⑥ 安全安心対策の見える化について、危機管理としては医療機関との連携も必要である。
- ⑦ コロナ収束後の高付加価値な取組として、適疎は安心ブランドにもなり、付加価値として価格を上げられる。目標値は入込数ではなく、消費額で良い。
- ⑧ 石巻地域ファンについて、県外の方のみを線引きするのではなく、県民や移住者などもパートナーとして取り込んでいくべき。
- ⑨ 東松島や牡鹿半島は、まだ十分に観光施設やインフラが整備されていないが、景色が素晴らしい。ワークーションで地価の高い都市部でなくても仕事ができるとか、オリンピック中の密を避ける場所として押し出してはどうか。
- ⑩ G o T o キャンペーンは、圧倒的な予算で行われるが、市民は困惑している。安心安全対策を観光施設だけがするのではなく、お客様にも負担していただき、一緒に作るべき。
- ⑪ 職員の検温や、お客様の問診、お掃除ロボの導入など「見える化」により、お客様が戻る。
- ⑫ 県にPCR検査の充実をお願いしたい。感染していない人が経済を回すようにできる。

(6-4) 第4回石巻圏域会議

【日時】 令和2年9月4日(金) 15時00分から17時00分まで

【場所】 大もりや多目的ホール

【委員からの主な意見】

- ① 二次交通について、特に仙台以外での利用拡大を回復戦略に記載してほしい。既存の制度の利用だけではなく、これを機に二次交通に関する新制度の開発などに踏み込むべき。
- ② マイクロツーリズムについて、コロナ後も観光の大きな潮流になると考えられることから、回復戦略でもっと強く触れてほしい。
- ③ 震災復興祈念公園などニーズがあると考えられる震災関連施設について、回復戦略の中で全く触れられていない。被災県として震災伝承や修学旅行などのニーズにしっかり応えられるよう戦略を立てるべき。

- ④ デジタルマーケティングについて、データに基づくマーケティング戦略が必要になってくる。非接触型のサービスではビッグデータの収集も可能である。それも目的に、このサービスの導入を全県で進めてはどうか。
- ⑤ インバウンドの情報発信として、山口県下関市がFacebookジャパンと提携し英語で発信している。地域から世界に発信していくことも大切になってくる。
- ⑥ 感染者やクラスターは、いつどこで発生してもおかしくない。一生懸命実施している経済の回復に水を差しかねない。感染者やクラスターが発生した場合の対策も検討する必要がある。
- ⑦ インバウンドの回復に関連して、どの国がターゲットと考えているのか。インバウンドと同時にアウトバウンドも併せて考えなければならない。
- ⑧ 「視点2(3) 交流人口の拡大に加えて関係人口の拡大へ」について、コロナ禍の中、オンラインやSNSのみで関係を維持し続けていくのは難しい。復興祈念公園など話題性のあるリアルなものを、関係人口を拡大させる素材として盛り込んでほしい。
- ⑨ 関係人口・交流人口について、この10年で関わっていただいた方々に、もう一度来ていただけるような仕組みづくりをしていきたい。具体的には派遣で石巻地域に来た国や自治体の職員との交流を、まずは実施していきたい。
- ⑩ みやぎ観光回復戦略案の内容は素晴らしいが、どのように実行していくのかが何より重要なのだと考える。
- ⑪ みやぎ観光回復戦略案は、県全体と各圏域の関係性が必ずしも結びついていない様に感じられる。圏域の意見を計画の中に更に具体的に入れ込んでいくべき。

(7-1) 第1回気仙沼・本吉圏域会議

【日時】 令和2年6月18日(木) 13時30分から15時45分まで

【場所】 気仙沼合同庁舎1階大会議室

【委員からの主な意見】

- ① クラウドファンディング事業は、複雑で利用しづらく事業者の規模や情報発信力により差が出る可能性がある。割引券の発行等分かりやすい支援策にすべきである。
- ② コロナの前に単に戻すのではなく、今後同様の事態が発生した際に、国や県の支援を待つというのではなく、今回の経験を生かして新しい観光のモデルをつくるべき。
- ③ 新しい生活様式に対応するための施設の改装費用、衛生用品購入等に対する助成制度が必要
- ④ 関東圏との行き来自体がまだ躊躇されているので、まずは近場の観光客からの誘致から始めることは有効。近場での観光需要をどうするのが取り急ぎの課題。例えば県南地域と県北地域間相互の誘客を促進する利用券の発行など。
- ⑤ 登米市、栗原市、岩手県南部地域との広域連携観光商品の造成。
- ⑥ マリンスポーツ、釣り、キャンプ等アウトドアなど密を回避する観光資源と宿泊・食事をセットにした観光商品の造成
- ⑦ 密を回避したりリモートワークや副業・兼業の拠点など、首都圏から地方へ流動する可能性があり、地域の一つのチャンスになり得る。そのために、きっかけをつくり、関係人口の構築が必要。

- ⑧ 宿泊業者だけではなく飲食店に対する支援も必要である。
- ⑨ 三陸道全線開通、NHK 朝ドラの舞台、南三陸の震災復興祈念公園の全面オープンなど、圏域の強みがある。
- ⑩ 小さな施設だと生活基盤と事業基盤が共有。感染症予防対策を万全にしても完全に防止することは出来ない。第2波、第3波に備え、施設内で感染症が発生してしまった場合の県としての対応策等を示してほしい。
- ⑪ 圏域の観光資源を、どのように情報発信していくかが課題。
- ⑫ 中長期的な課題として、これまでのキャンペーンなどの検証が必要。

(7-2) 第2回気仙沼・本吉圏域会議

【日時】令和2年7月14日(火) 13時30分から15時30分まで

【場所】気仙沼プラザホテル飛天の間

【委員からの主な意見】

- ① 教育旅行について、首都圏から感染者数が少ない地域へと行先が移行しており、当圏域も候補地として引き合いが多くなっている。また、密を避けるため、大型バスでの一斉移動や大規模宿泊施設での一括宿泊が見直されるなどしている。
- ② 圏域の観光コンテンツ・食・宿泊・ショッピング施設を一体的に楽しめるような取組が少ない。
- ③ 観光客を受け入れる側に感染リスクに対する不安感がある。当面、県内在住者の県内における観光需要を喚起していくことが必要。
- ④ 当圏域の観光資源の魅力や宿泊施設・観光関連施設等における安全安心の取組についての効果的な情報発信。その際に、圏域の魅力を再度しっかりと認識した上で、YouTubeやNetflixなどデジタル媒体のほか、マップや看板など従来からの媒体も含め幅広く実施する。
- ⑤ 教育旅行のニーズの変化に的確に対応したプランを造成し、地域内の事業者が連携して取り組む。
- ⑥ ワークーションの需要調査を実施する。
- ⑦ 事業者が安心して観光客を受け入れられるよう、感染症拡大の状況に応じた対応方針などを県がガイドラインとして明確に提示する。
- ⑧ 「基本理念」が抽象的なので、もっと具体的に示すべき。
- ⑨ 「みやぎにしかないアドバンテージ」をもっとたくさん示すべき。
- ⑩ 回復の状況が具体的にイメージできるよう、観光客数や経済的指標などを対比させて段階的に示してほしい。
- ⑪ 感染症拡大防止と観光振興はどちらも重要なので、バランスよく取り組めるよう配慮してほしい。
- ⑫ SWOT分析により「強み」「弱み」「機会」「脅威」を可視化すれば、戦略は自ずと見えてくるのではないかと。

(7-3) 第3回気仙沼・本吉圏域会議

【日時】令和2年8月27日(木) 13時30分から15時30分まで

【場所】南三陸町役場第2庁舎大会議室

【委員からの主な意見】

- ① SDGz, DX, Ma a Sが、これからのキーワードになることは理解するものの、それを観光産業にどのように結び付けていくのかが具体的にイメージできない。
- ② NHK連続テレビ小説「おかえりモネ」に関する取組は、全県的に一丸となって取り組むべき
- ③ 基本理念が具体的ではない。基本理念と圏域の施策の方向性及び取組につながりがない。
- ④ インバウンドは当面の間、見込めないと思うので、インバウンドには固執しない方が良い。
- ⑤ イベントは観光への影響が非常に大きいので、イベントの回復に関する事項も盛り込むべき
- ⑥ ツール・ド・東北の成功例があるのでサイクルツーリズム推進に全県で取り組んではどうか。
- ⑦ 圏域の取組について、「自然の中で楽しむスポーツやレクリエーションを組み合わせた体験型」をもっと具体的に記載すべき
- ⑧ 圏域の取組について、「短期」「中長期」の区分分けは、困難度や重要度なども含めて、もっと多角的に整理すべき
- ⑨ 圏域の取組について、市町・県・事業者が連携し、情報の共有化を図った上で、一つの目標に向かって一緒に取り組めるような現実的なアクションプランを策定してほしい。
- ⑩ 圏域の取組について、広域連携の一つの取組として、プレミアム商品券発行事業を提案する。